

白樂天

世阿弥作

| | | | |
|---|----|----|-----|
| 季 | 地 | ワキ | 前 |
| は | は | シテ | 白樂天 |
| 雜 | 肥前 | ツレ | 漁翁 |
| | の海 | 漁夫 | |

ワキカール「そもそも是は唐の太子の賓客。白楽天とは我事なり。

詞「さても是より東に当つて國あり。名を日本と名づく。急ぎ彼土に渡り。日本の智恵を計れとの宣旨に任せ。唯今海路に趣き候。

次第「舟漕ぎ出て日の本の。く。其方の國を尋ん。

道行「東海の。波路遙に行く舟の。く。跡に入日の影残る。雲の旗手の天つ空。月また出づる其方より。

山見えそめて程もなく。日本の地にも着きにけり。

く。

詞「海路を経て急ぎ候ふ程に。是ははや日本の地に着きて候。暫く此所に碇をおろし。日本のやうを詠めばやと存じ候。

シテ、ツレ一聲「不知火の。筑紫の海の朝ぼらけ。月のみ残るけしきかな。

シテサシ「巨水漫々として碧浪天を浸し。

二人 「越を辞せし范蠡が。扁舟に棹を移すなる。五湖の
煙の波の上。かくやと思ひ知られたり。あらおも
しろの海上やな。

下歌 「松浦潟。西に山なき有明の。

上歌 「月の入る。雲も浮ぶや沖つ舟。く。互にかゝる

朝まだき。海は其方か唐の。船路の旅も遠からで。

一夜泊と聞くからに。月も程なき名残かな。く。

ワキ詞 「我万里の波濤を凌ぎ。日本の地にも着きぬ。是に

小船一艘浮べり。見れば漁翁なり。如何にあれな
るは日本の者か。

シテ 「さん候是は日本の漁翁にて候。御身は唐の白楽天
にてましますな。

ワキ 「不思議やな始めて此土に渡りたるを。白楽天と見
る事は。何の故にてあるやらん。

ツレ 「其身は漢土の人なれども。名は先立つて日本に聞
ゆ。隠れなければ申すなり。

ワキ

「たとひ其名は聞ゆるとも。それぞとやがて見知る事。あるべき事とも思はれず。

シテ、ツレ

「日本の智恵を計らんとて。樂天來り給ふべきとの。

聞えは普き日の本に。西を詠めて沖の方より。船だに見ゆれば人毎に。すはやそれぞと心づくしに。地

「今や／＼と松浦舟。／＼。沖より見えて隠れなき。

唐舟の唐人を。樂天と見る事は。何か空目なるべき。むつかしや言さやぐ。唐人なれば御詞をも。

とても聞きも知らばこそ。あらよしな釣竿の。暇をしや釣垂れん。／＼。

ワキ詞

「なほ／＼尋ぬべき事あり舟を近づけ候へ。如何に

漁翁。さて此頃日本には何事を覗ぶぞ。

シテ
「さて唐土には何事を覗び給ひ候ふぞ。

ワキ
「唐には詩を作つて遊ぶよ。

シテ詞

「日本には歌をよみて人の心を慰め候。

ワキ
「そもそも歌とは如何に。

「夫れ天竺の靈文を唐土の詩賦とし。唐土の詩賦を以て我朝の歌とす。されば三国を和らげ来るを以て。大きに和ぐと書いて大和歌と読めり。しろし召されて候へども。翁が心を御覽せん為め候ふな。

ワキ
「いや其儀にてはなし。いでさらば目前の氣色を詩に作つて聞かせう。青苔衣を負ひて巖の肩にかかるとかや。白雲帶に似て山の腰をめぐる。心得たるか漁翁。

シテ
「青苔とは青き苔の。巖の肩にかかるが衣に似たるとかや。白雲帶に似て山の腰をめぐる。おもしろしく。日本の歌もたゞ是候ふよ。苔衣着たる巖はさもなくて。衣着ぬ山の帶をするかな。

ワキ
「不思議やな其身は賤しき漁翁なるが。かく心ある詠歌を連ぬる。其身は如何なる人やらん。

シテ
「人がましやな名もなき者なり。されども歌を読む事は。人間のみに限るべからず。生きとし生ける

物毎に。歌をよまぬは無き物を。

ワキ 「そもや生きとし生ける物とは。さては鳥類畜類までも。

シテ 「和歌を詠ずる其ためし。

ワキ 「和国に於て。

シテ 「証歌多し。

地 「花に鳴く鶯。水に住める蛙まで。唐土は知らず日本には。歌をよみ候ふぞ。翁も大和歌をば。か

たの如くよむなり。

地クセ

「そもそも鶯の。歌をよみたる証歌には。孝謙天皇の御宇かとよ。大和の国高天の寺に住む人の。しきねんの春の頃。軒端の梅に鶯の。来りて鳴く声を聞けば。初陽毎朝来。不遭還本栖と鳴く。文字に写して是を見れば。三十一文字の。詠歌の詞なりけり。

シテ 「初春のあした毎には来れども。

地

「あはでぞ帰る。もとのすみかにと聞えつる。鶯の

声を始めとして。其外鳥類畜類の。人にたぐへて

歌をよむ。ためしは多く荒磯海の。浜の真砂の数々

に。生きとし生ける物。何れも歌をよむなり。

ロング地

「實にや和國の風俗の。く。心有りける海士人の。

実に有難き習ひかな。

シテ

「とても和國の翫び。和歌を詠じて舞歌の曲。其い

ろくを顕はさん。

地

「そもそも舞樂の遊びとは。其役々は誰ならん。

シテ

「誰なくとても御覧ぜよ。我だにあらば此舞樂の。

地

「鼓は波の音。笛は龍の吟ずる声。舞人は此尉が。

老の波の上に立つて。青海に浮びつゝ。海青樂を
舞ふべしや。

シテ

「蘆原の。

地

「國も動かじ万代までに。 (中入)

後ジテ

「山影の。うつるか水の青き海の。

地 「波の鼓の海青楽。 (真の序)

シテワカ
「西の海。あをきが原の波間より。

地 「顯はれ出でし住吉の神。住吉の神住吉の。

シテ
「顯はれ出でし住吉の。

地 「住吉の。神の力のあらん程は。よも日本をば従へ
させ給はじ。速に浦の波。立ち帰り給へ楽天。

地 「住吉現じ給へば。く。伊勢石清水賀茂春日。鹿

島三島諏訪熱田。安芸の嚴島の明神は。娑竭羅龍

王の。第三の姫宮にて。海上に浮んで。海青楽を
舞ひ給へば。八大龍王は八りんの曲を奏し。空海
に翔りつゝ。舞ひ遊ぶ小忌衣の。手風神風に。吹
きもどされて唐船は。こゝより漢土に帰りけり。
実に有難や神と君。実に有難や神と君が代の。動
かぬ国ぞ久しき。く。